



## スマホお入学ゼロ年

すずき ようこ  
鈴木 庸子

●イタリア語通訳・翻訳家 在イタリア・ナポリ

「2013年度より、全国の公立小・中・高等学校入学は、オンラインによる手続きが義務づけられました。期間は1月21日から2月28日までです。サイトは〇×、本校の小中学部のコードナンバーは各々〇〇、××。なお本校では、情報機械設備を持たないご家族へのサポートをいたします云々」

9月に始まるイタリアの教育年度。その入学手続きは、私が住む市の市立幼稚園及び小・中学校の場合、1月後半から2月一杯の間に、保護者が入学希望校の事務室に指定の曜日・時間に出向き、簡単な指定書類に記入したら完了と、10分もかからぬあっさりしたものであった。それが2012年度から、日本の文部科学省に当たる教育・大学・研究省(以下教育省)の旗振りで、この手続きは従来通りまたはオンラインの二者択一となり(とはいえ、後者を選んだ人の話は聞いたことがない)、2013年度からはオンライン限定となる・・・

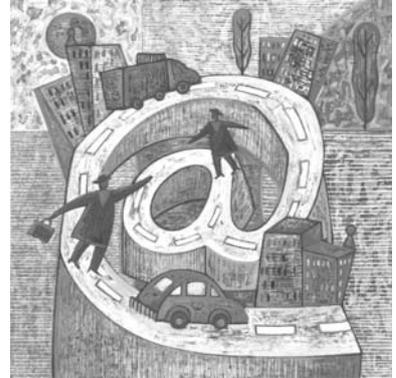
噂は、年末からちらほらと聞こえて来てはいた。しかし、クリスマス休暇明け、再開したての幼稚園で渡された、校長先生直々のサイン入りプリント(通園3年目にして初めて)に目を通すと、この話は一瞬のうちに現実のものとなった。小学校入学をこの秋に控える娘のクラスの父兄は、文字通りパニックである。「この手のシステム作りが下手な御上のこと、発足年の今年なんか欠陥がない訳がない。教育省の落ち度で、うちの子の手続きにミスがあったりしたら、誰が責任とるんだ？」

「事務室での書類手続きの時にしてきた、『Aちゃんと一緒に』『B先生のクラス』とか、オフィシャルじゃないリクエスト。オンラインじゃどうしろって言うの！」間髪いれず、メディアを通したオンライン入学に関するニュースや宣伝が始まり、我々の不安は募るばかり。「よりによって、なんで今年から」と不貞腐れていたところだが、何せ他ならぬ我が子のお入学がかかっている。

腹を決めて、いざ反撃。「C校の校長先生とDちゃんのママが仲良しだから、あそこなら彼女にくっついとけば間違いなし」「E校は今年から小学部を始めるけど、皆知らないから、私達仲良しだけでこっそりクラスをつくっちゃいませよ」「人気のF先生、ここだけの話、異動になるって」「政治家のG先生が面倒みてくれるから、HちゃんとIちゃんは9割9分うちの子と一緒に」・・・元祖コネ社会ここにあり。寄ると触ると怪しい「情報交換」が花盛り。工作中にも、「Jちゃんのママから、お宅もK校希望って聞いて」と電話が追ってくる。

我が子の5年間がかかっているという責任感で、とくに冷静さを失い、肩をいからせていた我々父兄。新システム導入の波に、完全に足元をすくわれ、皆仲良く溺れていた。

いよいよオンライン入学手続き元年初日。期待を裏切ることなく、午前10時に専用サーバーがパンクし、その後1日中ほとんど繋がらず。「そら見たことか」とメディアは一斉に書き立てたが、



教育省はすぐにサーバー許容量を倍増。殺気立っている父兄には「入学希望者数が定員を超えた場合、選択基準は登録順ではありません。少々日をおいて登録ください」。数日後には、滞在許可証申請中の外国人等、イタリアの税金番号を持っていない父兄の子供は、サイトが受け付けない事態が指摘されたが、「希望入学校に足を運んでもらえれば、係の事務員が処理します」。システムのとんでもない穴を予想して恟々としていた我々は、まっとうさに拍子抜けした。唯一意表をつかれたのは、初日午前0時30分の時点で、すでに1,200人が手続きを済ませていたことである。後日小1時間かけて登録した、大多数の父兄の1人としては、教育省か入学手続きプログラム関係者の家族に違いないとやっかみ半分に思うのだが、新システム一番乗りを目指した人達だったのかもしれない。

さて。我がマンションは私立(幼稚園と小学校)と公立(幼稚園、小・中学校)の学校施設に挟まれており、我々の第一希望は後者である。ここの守衛さんとは毎日顔を合わせ、娘は放課後のサッカー教室に通い、ベランダから教室が覗ける距離にあるにもかかわらず、入学手続きはとにかくオンライン。ペーパー世代としてはかえって不便と言う思いを拭いきれないが、これも時代の流れ。オンラインが当然、公平と多くの父兄が感じる日は遠くないのであろう。2月初旬、自宅のパソコンで粛々と入学手続きをとった。

登録完了直後、教育省からメールが来た。「生徒K(娘の氏名)の入学願書は、2月〇日、希望校Lへ転送されました。手続き番号は〇×です」。これで、オンライン手続きに晴れて成功した証拠もできた。めでたし、めでたし。

いかにもお役所的なこのコンファームメールを感慨深く眺めている間に、耳ざといママ友が、「念には念を入れたい父兄は、これを印刷したものを希望校の事務室に提出してもよい」という話を聞きつけて来た。「子供の将来に細心の注意を払う」と言う立派な口実で、入学手続きのオフィシャルではない部分を解決できる道をつくってくれるとは。やるではないか、イタリア教育省。

ママ友と綿密な打ち合わせを重ね、クラスメート希望者リストを練り上げ、プリントアウトした同メールにこれを書き込む。担任の先生に関しては、あまりに不確定要素が多いため、様子を見ることで合意した。

登録手続きから1週間後、打ち合わせメンバーと連れだって、我がお隣に1枚の紙を提出した。同時にここ1ヶ月、孫悟空の緊箍児のごとく頭を絞めつけていた何かが、するりと抜け落ちた。

待ったなしで押し付けられた、オンライン入学一番駆け。どんな苦行が待ち受けているのかとおののいたが、まずは杞憂であった様子である。後はコネをケアしつつ、心静かに秋を待つのみである。